



1



2



3

■地元・伊勢堂神社の例大祭で奉納された「本剣舞」。荒れ狂う武者の亡霊たち(右)を釈迦の化身である猿「カッカタ」(左)が鎮める物語

■「本剣舞」では、「胴取り」と呼ばれる二人の少女が太鼓を打つ。

「胴取り」を務めるのは、4月にデビューした高橋由衣花ちゃんと佐々木よつばちゃん

■おはやしは、太鼓、笛、手平鉦の三拍子に、唱歌が加わって行われる。踊り手とおはやしが一体となり、魂のこもった舞いとなる

奥州遺産

—ときを越え

受け継がれるもの—

第109回

朴ノ木沢念仏剣舞

(国指定重要無形民俗文化財)

胆沢小山

愛らしい胴取りが、太鼓を打ちながら軽やかに舞う。静かな始まりから、憤怒の面を付けた踊り手が躍動していく様は、観るものを圧倒し、心の奥底を震わせる。

朴ノ木沢念仏剣舞は、源義経主従の鎮魂のための踊りで、平泉高館から胆沢都鳥を経て1796年に朴ノ木沢集落に伝わった。原形を崩さないまま、地域の中で親から子、子から孫へと守り継がれ、先祖の供養や娯楽の一つとして暮らしに溶け込んできた。現在は16人が所属し、受け継いだ九つの演目を地域の祭りや催しで披露している。庭元の三田一男さんは「今はいろんな娯楽があるが、地域の人たちに親しまれ、喜ばれるものであり続けたい」と理想の姿を思い描く。

今年2月には、全国各地の民俗芸能団体と連合組織を結成。「風流」のグループとしてユネスコ無形文化遺産への登録を目指している。200年以上にわたり、郷土に寄り添い続けた朴ノ木沢念仏剣舞。次は世界を舞台にその刀を振るう。

広告

●広告の問い合わせは、(株)東広社 (☎ 0197-64-1523)